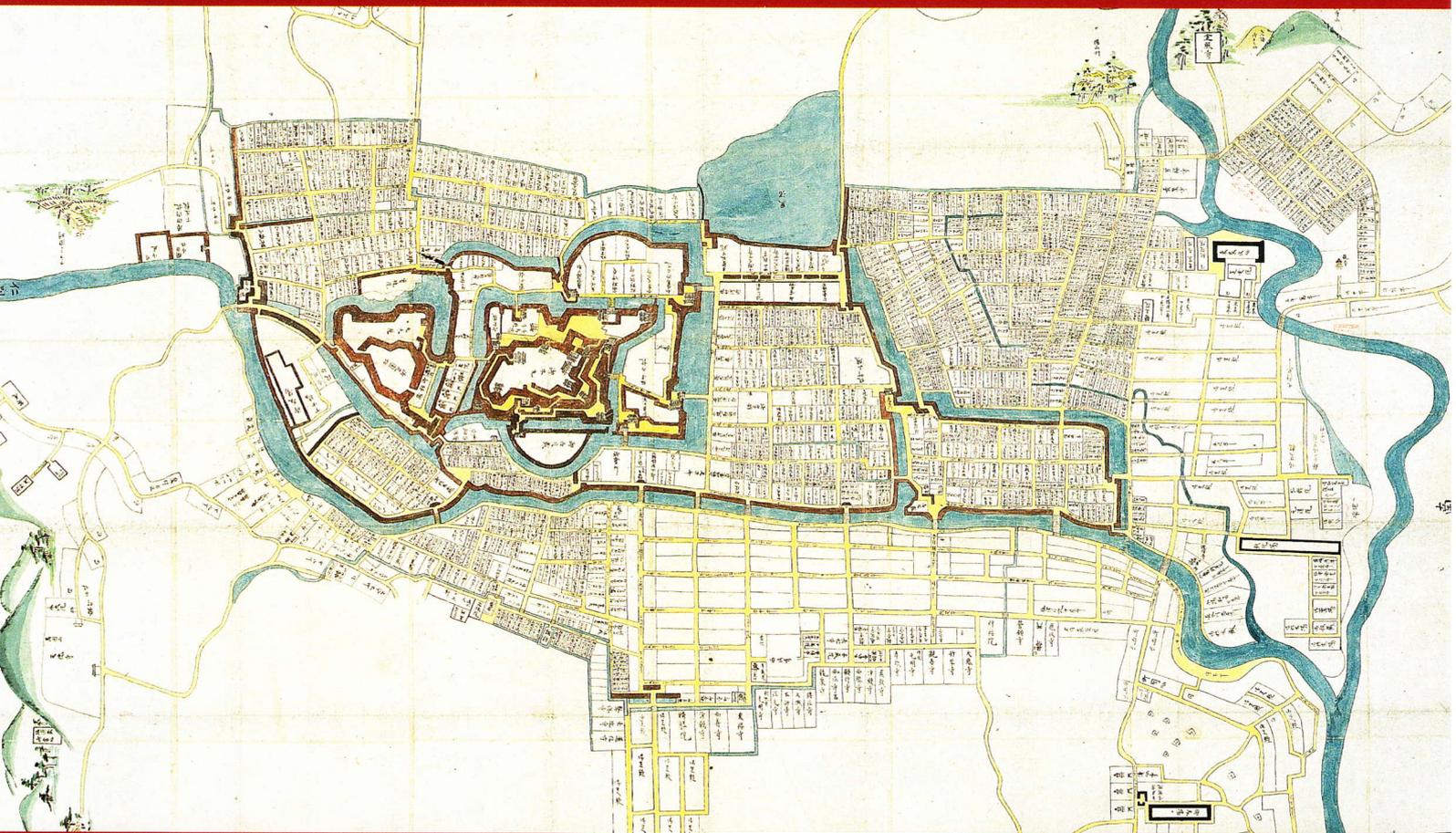


●平成16年度 秋田県立図書館企画展

# 久保田城下町の 建設と変遷



期間

前期 平成16年 8月28日(土) ▶ 9月24日(金)  
後期 10月16日(土) ▶ 11月5日(金)

場所

秋田県立図書館特別展示室

企画展示  
報告会

第1回 平成16年 9月2日(木) 秋田会場 (秋田県立図書館)  
第2回 平成16年 9月8日(水) 横手会場 (かまくら館)  
第3回 平成16年 9月20日(月) 大館会場 (大館市立中央公民館)

## はじめに

佐竹氏は、慶長七年（一六〇二）九月十七日、旧領主の秋田安東氏の居城である湊城に入城しましたが、翌八年（一六〇三）五月、内陸の神明山（現在の千秋公園）に新しく城を築くことにし、翌九年（一六〇四）八月二十八日には久保田城に居城を移し、湊城は破却されました。

今年、平成十六年（二〇〇四）は、佐竹氏が久保田城に移ってちょうど四〇〇年にあたる年であります。

それで、これを機に、由利・鹿角を除いた現在の秋田県の大部分を領国として支配した佐竹氏が、本拠に定めた久保田城とその城下町をどのようにに建設したのか、また、国替直後の慶長期から江戸時代後期の文政期までその城下町がどのように変わったかなどを、当館所蔵の絵図により振り返ることにしました。

最初に掲げた「御国替当座御城下絵図」は、久保田城着工直後の城下の様子を示したものです。次の「秋田久保田城絵図」「御城内御座敷廻絵図」の二点は、いずれも江戸時代後期のものでありますが、久保田

城の建設プランがわかるものと思いません。

また、「久保田城御城下絵図」と「外町屋敷間敷絵図」からは、寛文初年（一六六一）の久保田城下町の全体・内町（侍町）と外町（町人町）の詳細な様子がわかります。

そして、寛保二年（一七四二）の「御城下絵図」・延享二～三年（一七四五～四六）の「久保田御城下絵図」・宝暦九年（一七五九）の「御城下絵図」・寛政期（一七八九～一八〇〇）の「城下御絵図」・文政四年（一八二二）の「御城下絵図」からは、久保田城下町の変遷の様子がわかります。

さらに、「羽州久保田大絵図」は、文政十二年（一八二九）頃の内町や周辺地域が、実に詳細に描かれています。

最後に、「土崎湊町絵図」は、文化年間（一八〇四～一七）の土崎湊町の様子を描いたものですが、秋田藩では、久保田城下町だけでなく、流通の拠点である土崎湊町も、詳細な絵図を作成していたことがわかります。

さて、久保田城築城の様子はこれまでまったくといってよいほどわか

っておりませんが、「絵図」とともに、「史料」を読んでいくことで、ある程度のことは、推測できると思います、次のような「史料」も合わせて展示することとしました。

秋田藩政の根本史料である「国典類抄」や「御亀鑑」、曲輪や堀の長さなどの城の構造が記載された「羽州秋田郡窪田城絵図帳」、内町の屋敷割のなどを定めた「当用式」、藩主の書状等を含む「秋田藩家蔵文書」、重臣の日記である「梅津政景日記」や「洪江和光日記」などがこれにあたります。

こうした「史料」等を参考に、一連の「絵図」に記載されている事項を検討していただければ、今まで以上に様々ながわかってくるのではないかと思っております。

また、今回の展示を通して、当時の城下町建設のプランが現在にまで生きていることも伺えるのではないかと思います。

## 『国典類抄』について

『国典類抄』の前編は、藩祖佐竹義宣から五代義峰までの五代にわたる、後編は六代義真・七代義明・八代義敦の三代にわたってまとめられた佐竹家の故実典札の記録であると同時に、その領国である秋田藩の政治記録でもあります。

文化八年（一八一）に九代藩主佐竹義和より編さんを命じられ、前編は文化十三年（一八一六）閏八月、後編は文政二年（一八一九）閏四月に完成しました。前編二二六冊・後編二八一冊の編成です。

本書は、家老正田貞定綱を総裁に、山方太郎左衛門泰純ら六人を撰者とし、「文書所」で編集が進められ、藩庁内の蔵書や家老らの勤役日記など三、〇〇〇冊近い書物を出典として引用しており、両編とも吉部・凶部・軍部・賓部・嘉部・雑部の六部立の形式で編集されています。

質・量ともに全国的にもまれで、学界からも注目されている第一級史料であるといえます。

現在県立図書館で所蔵している本書は、草稿本であり、清書本は現在

のところその所在がわかっておりません。

昭和五十三年度より六十二年度までに、翻刻・活字本として全十九冊が県立図書館から刊行されています。

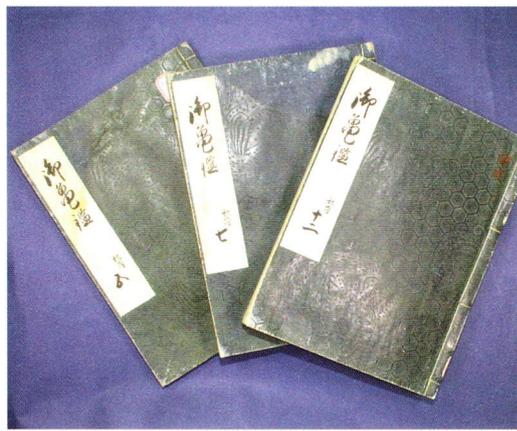


### 『御鑑』について

『御鑑』は、歴代秋田藩主の中でも名君にあげられる、第九代佐竹義和の一代記ですが、題名に示されているように、後代の亀鑑（手本）とする意図のもと藩庁で編さんされたものです。

義和は、文化八年（一八一二）、『国典類抄』の編さんを命じ、文政二年（一八一九）に完成しています。

義和の没後、藩主の公式行事や事蹟の記録である歴代御家譜のひとつとして『義和公譜』が編さんされましたが、これとは別に『国典類抄』の続編として、また、『義和公譜』の引証本として、『御鑑』が編さんされたものと考えられます。



内容は、安永四（一七七五）年元旦の江戸藩邸での出生から文化十二年（一八一五）までの四十一年間の編年体の記録で、江戸での事蹟を記した「江府」七九冊、国元秋田での動静や事蹟を記述した「秋府」三十六冊からなっています。

故実典礼を重んじた寛政・文化期の秋田藩の情勢を知る上で、欠くことのできない第一級の根本史料であるといえます。

昭和六十三年度より平成六年度までに、翻刻・活字本として全七冊が県立図書館及び県公文書館から刊行されています。

『洪江和光日記』は、秋田藩の御相手番（家老に次ぐ役職）として活躍した洪江堅治和光の日記です。一部欠本はありますが、原本九十八冊は文化十一年（一八一四）正月から天保十年（一八三九）十二月まで、二十六年間にわたって記されています。また、一年分が春夏秋冬の四冊になっていて、各冊とも年号・干支・月ごとの重要事項が記されています。

### 『洪江和光日記』について

洪江和光は寛政三年（一七九二）、初期藩政を支えた洪江内膳政光の子孫の分流十兵衛家に生まれ、享和三年（一八〇三）、本家敦光の養子となり家督を相続し、文化元年（一八〇四）に出仕し、義和より「和」の一字を与えられました。そして、三度延べ二十三年にわたって御相手番を勤めました。天保八年（一八三七）、嫡子貞治厚光に家督を譲り隠居、濁

川の居宅（仁泉舎）に移り、天保十四年（一八四三）五十三歳で没しています。

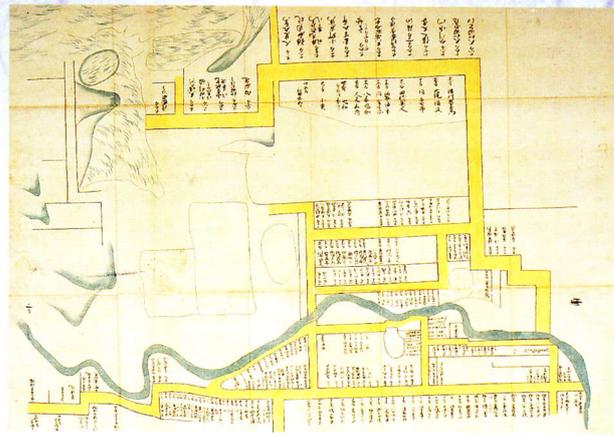
日記の内容は、天保一揆や大塩平八郎の乱についても触れているなど、当時の上級武士の生活や考え方・社会情勢を知るうえでも重要な史料であるといえます。

平成七年度から現在まで、翻刻・活字本として十一冊が、県公文書館及び県立図書館から刊行されています。



## 「御国替当座御城下絵図」

(慶長九年頃) 一五〇×一二九



向右近宣政が屋敷地を与えられるのは、慶長九年（一六〇四）八月のこととされています。

仁別川（旭川）は、現在のように南北に直流しているのではなく、台所町から穴門を通り、古川掘端町から五丁目蔵辺へ流れるように蛇行して描かれています。この仁別川の掘り替え工事は築城と同時に着手されたものと推測されます。

東根小屋町の西側に「梅津半右衛門・同茂右衛門」の名がありますが、これは、藩主佐竹義宣の側近として藩政初期を支えた、近習出頭人梅津憲忠・政景兄弟のことです。

大町一丁目辺の「すわ（春王）」は、慶長十五年（一六一〇）五月二十六日に藩主義宣の寄進で保戸野諏訪町に建立される諏訪神社の元の位置であったものと考えられます。

また、後の外町にも家臣の名が並んでいますが、外町の建設が本格的にはじまるとされる慶長十二年（一六〇七）より前の様子であるということもわかります。

以上から、この絵図は、およそ慶長九年（一六〇四）頃の様子を描いたものと考えることができます。

佐竹氏は慶長八年（一六〇三）五月に、土崎湊から内陸の神明山に新居城を築くことに決め、築城に着手し、翌慶長九年（一六〇四）八月二十八日には久保田城に居城を移しました。それと同時に、城下に家臣の屋敷割を進めていったと考えられますが、この絵図はそうした状況に対応しているものと思われま

す。三ノ丸大手門脇の東方の上中城に「向右近」の名がありますが、家老

## 「秋田久保田城絵図」

(文政四年) 一〇八×八四



どがあげられます。

山の頂上部に本丸を置き、その東側に二ノ丸を配し、本丸北側には堀と八幡山別郭を隔てて北ノ丸を設け、堀で囲んでいます。本丸・二ノ丸の堀を隔てて、北・東・南の三方をコの字型に囲む形に三ノ丸が設けられています。本丸西には、堀を隔てて兵具蔵が設けられました。

本丸には、「御出し書院」と通称される櫓座敷、新兵具御隅櫓、表門、裏門、帯曲輪門、埋門、二ノ丸には、「黒門」と通称される二ノ丸東御門、松下門、厩門、安楽院・勘定所などの諸役所・鐘樓が置かれた区域、厩、金蔵などをみることができ、三ノ丸は、東部を上中城、南部を下中城、東北部を山ノ手といい、重臣の屋敷が置かれました。

八幡郭は三ノ丸の一部ですが、常陸から移された正（小）八幡宮をまつたことから八幡郭とよばれ、大八幡宮とその別当である一乗院が置かれました。

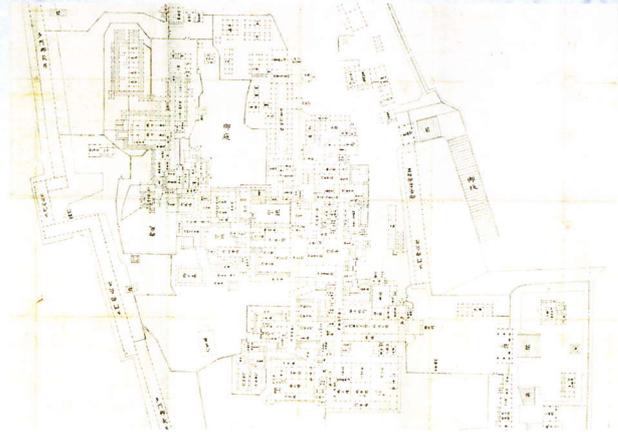
北ノ丸には、北ノ丸初蔵と正八幡宮・稲荷社の別当をつとめる金乗院が置かれました。

作成年代は表書にあるように、文政四年（一八二二）であり、この年幕府の国目付（丹羽長堅・三浦正通）が秋田に下向した際に提出したものの控えと思われる。

築城にあたり、仁別川を掘り替え、その川路を城の外堀として最大限に利用しています。久保田城の特徴としては、複数の廓を備えた平山城で、石垣がほとんど無いこと、天守閣が初めからつくられなかったこと、な

## 「御城内御座敷廻絵図」

二八二×二五九



本丸御殿は藩主とその家族の居住空間であり、一方で藩の政庁として政務をつかさどる重要な場所であった、これらの機能をもった建物群が複合的に配置されていました。

本丸御殿の他に、多門（多聞長屋のことでなく、屋根のある多聞風の板塀のことと思われる。）五か所、多聞長屋五棟、諸番所六か所、蔵四か所、櫓四か所（北西隅には新兵具櫓（現在の御隅櫓）、「御出し

書院」と通称される櫓座敷があり、城門は、表門（一ノ門）・裏門・帯曲輪門・埋門の四つがありました。が、いずれもこの絵図で確認することができません。また、二ノ丸から本丸に至る途中に、「御物頭番所」をみることができません。

次に本丸御殿の内部をみていきますが、表門の正面奥に玄関があります。玄関部には番所・吟味役所などがあり、廊下を隔てた西側奥にも評定所や諸役所などがあって、この一郭が政務の中核であることがわかります。

一方、南側には儀式空間である広間と金之間があります。そして、玄関部の北側には、御法度書之間を挟んで、藩主の居住空間である各棟が建ち並びます。このうち、東側は御座之間・台所・御茶屋などの表向諸室となります。

さらに、表向の西側に御鈴廊下を経て奥向の各棟が連なり、奥御居間・長局などの諸室をみることができ、また、表向と奥向に挟まれた中庭の一郭に鷹屋の諸施設があることも確認できます。

## 「久保田城御城下絵図」

（寛文初年）一五八×二〇三



道路は黄色・堀川は青色・土塁は黒色と色分けされていて、内町は屋敷が細かく区画されており、屋敷ごとに人名・間口奥行間数が詳細に記されています。そして、大身層の下屋敷の位置も確認できます。

そして、町の中央部では、北から南へ仁別川（旭川）が貫流し、途中東からの太平洋川を合わせ雄物川にそそいでいます。

長野町西側にある「須田伯耆」は、

明暦三年（一六五七）に伯耆に改名しており、また、土手谷地町西側の小場家の屋敷地に「六郎」とありますが、万治元年（一六五八）十二月十三日に、小場三河義易が亡くなり、嫡六郎義房が嗣いでいます。そして、西隣の中谷地町北側の佐竹南家屋敷にある「新発意」は「佐竹南義敏」であると考えられ、寛文元年（一六六一）九月八日に、父南美作義蕃が亡くなっていることから、この年以降の様子と考えられます。

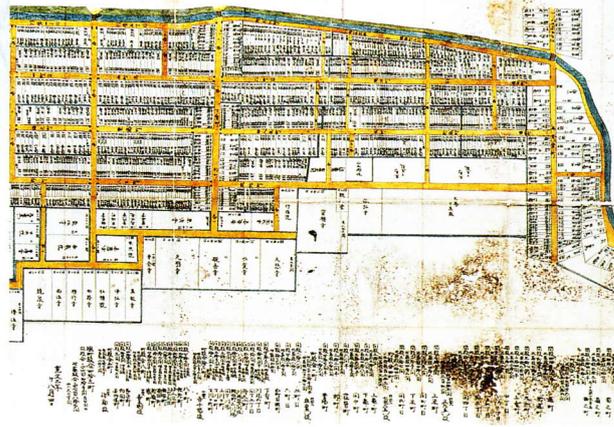
ところで、上中城の「保徳院」は佐竹東義直の後室であり、寛文三年（一六六三）に亡くなっています。また、寛文二年（一六六二）に、岡本玄蕃元弘が亡くなり、又太郎元朝が幼少にて家督を嗣いでいますが、絵図には「岡本玄蕃」とあるので、少なくともこの年以前の様子と思われま

す。

以上のことから、この絵図は、寛文元年から二年頃の様子を描いたものと推測でき、内町（侍町）の屋敷割が詳細に記載された絵図としては、当館所蔵の絵図の中では最古のものといえます。

## 「外町屋敷間数絵図」

(寛文三年) 七二×一四五



この絵図は表書から、寛文三年(一六六三)の外町(町人町)の様子を描いたものといえます。

城下絵図のほとんどが、外町を簡略化しているため、寛文初年の「久保田城御城下絵図」とこの絵図を合わせてみることによって、この時代の久保田城下の全体像の詳細を把握することができると思います。

道路は黄色・堀川は青色・土塁は緑色と色分けされています。

外町の町割は、通町・大工町と馬口労町を南北の両軸として、この間を東から川端、大町、肴町から茶町、亀ノ丁と南北に走る四本の通りと、これに続く上米町・下米町の二本の通り、さらにこれら結び東西に走る横小路とによって、縦横に区画されています。

このように、内町(侍町)特に足軽町はその性格上、道路は細く丁字やカギ型の道路が多いのに比べると、外町の道路は「碁盤の目状」に整然としていたこともわかります。

久保田における外町の町割の場合、間口は一軒前六尺五寸間、奥行は大町の二十五間を除いて他は二十間に割り付けられています。

寺町は常陸から移ってきた一乗院・東清寺・鱗勝院などを配するとともに、寛永年間まで土崎湊にあった旧寺院にも土地を与えて移転、または新寺を創建させるなどして、四十か寺を集めました。羽州街道が外町に入る口で道路を曲折させ、土塁をもって互い土手を築き、堀を設け、鉄砲組・兵具組の足軽屋敷を配したことと合わせ、寺町を西側の守りの前線としたと考えられます。

## 「御城下絵図」

(寛保二年) 二九×三三六



城下町周辺の記載が詳細かつ広域にわたっていて、村々や山にある諸施設や寺社、城郭内の施設や橋・門・櫓などが立体的に描かれ、道路は黄色・堀川は青色・土塁は緑色と色分けされています。

また、内町は一筆ごと間口・奥行間数が記され、足軽・小人・中間・同心等は、その支配頭と人数が、御厩・使番等はその身分と人数が記入されています。さらに、大身層の下

屋敷も知ることができます。

絵図の長町には北側に「町奉行所御用屋敷」、南側には単に「御用屋敷」と記されていますが、享保二十年(一七三五)七月三日に、従来長町に二軒あった町奉行飯屋を儉約のために一軒にし、もう一軒は宿所としています。

そして、絵図の東根小屋町東側に「茂木宮内」とありますが、寛保元年(一七四一)六月朔日に、茂木弥三郎は久保田へ登り、名を宮内に、嫡子幸南が出仕し、名を弥三郎に改めていることから、この年以降の様子を描いたものと思われます。

さて、同じく絵図の東根小屋町西側に、「石塚主殿」とありますが、寛保二年(一七四二)十二月十四日に、石塚主殿義行は亡くなっており、翌寛保三年(一七四三)六月朔日に、石塚源一郎は家督の御礼のため藩主に謁しています。

このことから、この絵図は寛保二年(一七四二)十二月以前の様子を示しているものと考えられます。

## 「久保田御城下絵図」

(延享二〜三年) 八三×一四三



全体的にみても、中心部や町周辺部での記載事項の漏れ等も多く、作図の精度としては多少雑なように思われます。

絵図の下中城西側、重臣・渡江氏宗家の屋敷の部分には氏名がありませんが、記載されていない理由はわかっておりません。

また、久保田城二ノ丸に「大こし掛け」とありますが、登城した主人に付き従った家来衆が休んだ場所と

思われます。

さらに、久保田城北ノ丸の「大木屋」の西側は「茶畑」と記載されています。

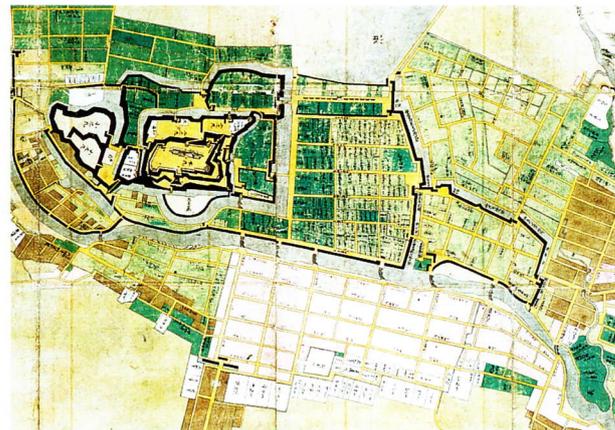
寛保二年の「御城下絵図」で長野町南端の宇都宮家の屋敷は「帯刀」とありますが、この絵図には「四郎」とあって、四郎が宇都宮家の家督を継ぐのは、延享二年（一七四五）十二月朔日のことで、「帯刀」典綱は、翌延享三年（一七四六）正月二十五日に亡くなっています。

同じく長野町の北端は多賀谷左兵衛の屋敷ですが、延享三年（一七四六）二月初めに、多賀谷左兵衛は実子が無いため養子を迎え、隠居のうえ、名を下絵に改めています。さらに、同年三月九日には、多賀谷氏の養子が出仕し、名を将監に改めます。

以上のことから、この絵図は、延享二年末から延享三年初めの久保田城下の様子を記録したものと考えられます。

## 「御城下絵図」

(宝暦九年) 二二×一七九



この絵図の作成年代は、表書に記載されているように宝暦九年（一七五九）であり、この年幕府の国目付（安西彦五郎・建部荒次郎）が、秋田に下向した際に作成され、提出したものの控えであると考えられます。

国目付派遣の目的は、宝暦八年に秋田藩主佐竹義明が死去し、その嫡子義敦がわずか十一歳で襲封したため、その領内を監察することにあつ

たと思われます。

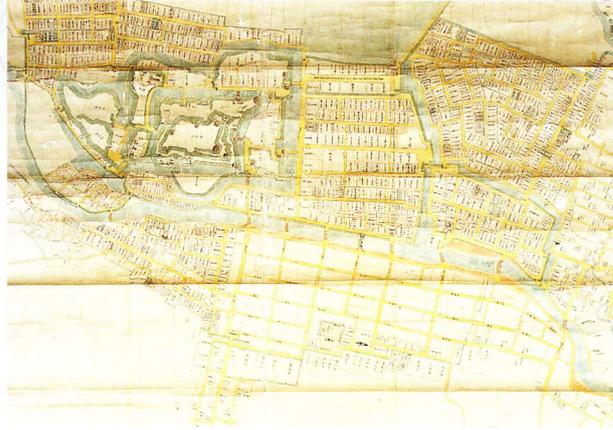
侍屋敷は緑色・足軽中間既者屋敷は茶色・町百姓屋敷は桃色・寺屋敷は白色・堀川は灰色・道は黄色・土塁は黒色と色分けされています。また、寺院・神社と城郭施設等は立体的に描かれています。

三の廓内の内町には、東から長野町・土手谷地町・中谷地町・東根小屋町・西根小屋町・上長町・土手長町の町名が記載されています。

ところで、外町（町人町）から二丁目橋を渡って廓内に入った突き当たりの土手長町には、町奉行役所（北・南の二か所）がありますが、ここにもみられるように、外町から廓内の内町（侍町）へは直通ではありません。仁別川（旭川）に沿った三の廓内の土手長町には土塁が築かれ、外町からは内町の様子を眺めることはできませんでした。また、各廓とも他からの道路には「互い土手」を設け、枳形門が見られるなど、四の廓までを含めた廓全体が一つの城郭を形成している点も久保田城下町の特徴といえます。

## 「城下御絵図」

三三三×二九一



月十二日に完成する「御学館」が、根小屋に貼紙加筆されています。

以上のことから、寛政年間にはこの絵図は、藩政記録用絵図として貼紙・加筆されながら、使用されていたことがわかります。

そして、現在の広小路に面している土手谷地町北端の佐竹西（小場）家の屋敷には、「佐竹石見」とあり、これは、安永二年（一七七三）に「石見」と改めた「佐竹義種」であることがわかります。

ところで、従来小人の家地であった中島の北半分が空白になっていますが、これは、宝暦九年（一七五九）七月の「中島流れ」といわれる大洪水で、下中島の家一〇五軒が瞬時に流出したため、その後は畑地や騎射馬場であったといわれています。

このことから、原図の作成年代は、宝暦九年（一七五九）以降のあたりまでさかのぼることができると推測できます。

さらに、長野町にある「中山政吉」とは、藩校明德館の祭酒を務めた中山文右衛門（菁莪）の子であり、文右衛門が病死するのは文化二年（一八〇五）五月二十七日のことです。

## 「御城下絵図」

（文政四年）一八五×三三二



この絵図の作成年代は、表書に記載されているように文政四年（一八二二）であり、この年五月に、幕府の国目付（丹羽長堅・三浦正通）の二人が、秋田に下向した際に作成された提出したものの控えであったと考えられます。

国目付派遣の目的は、文化十二年（一八一五）に秋田藩主佐竹義和が死去し、その嫡子義厚がわずか四歳で襲封したため、その領内を監察す

ることにあつたと思われる。そのため、城郭規模、堀の長さや幅、侍屋敷の数、足軽町・町人町の数等が記載されています。

侍屋敷は緑色・足軽中間既者屋敷は茶色・町百姓屋敷は桃色・寺屋敷は白色・堀川は灰色・道は黄色・土墨は黒色と色分けされています。また、城下周辺の主要高地や寺院・神社と城郭施設等は立体的に描かれています。

仁別川（旭川）にかかる橋はいずれも架け橋であり、この絵図においては、中島新橋・通町橋・一丁目橋・二丁目橋・四丁目・五丁目橋・四拾間堀町橋・馬口労町橋をみることでできます。また、「三丁目橋」が貼紙をして加筆されています。さらに、長野町の南端には、「寺社方」（寺社奉行所）文政六年（一八二三）設置」とこれも又貼紙をして加筆されています。

そして、宝暦九年の絵図と同様に、全般的に記載内容が簡略化され、侍屋敷も屋敷割や記名があるのは、上級武士に限られており、外町（町人町）も簡略に描かれております。

この絵図は「寛政御改正御城下絵図」の表題があり、ある期間城下の変更を記録する図として実際に使用されたものらしく、随所に貼紙で補筆がなされ、そのためか、折れ目や摩耗・剥落などの痛みがあります。

文政六年（一八二三）に長野町南端東側に「寺社方」が設置され、これが、これも図上に貼紙があり、補加筆されています。

さらに、寛政二年（一七九〇）二

## 「羽州久保田大絵図」

(文政十二年頃) 一五七×一五三



があります。

ところで、秋田藩の重臣洪江堅治和光が、文化十一年(一八一四)から天保十年(一八三九)まで書いた『洪江和光日記』を当館において所蔵しています。その中で、文化・文政期の記事に登場する町名や家臣のほとんどが、この絵図で確認することができます。

長野町南端の「寺社方役処」は、文政六年(一八二三)八月三日、元伊達外記屋敷に新規に建てられたものです。また、上中城の「小鷹狩右近」については、文政十年(一八二七)八月、復氏願を提出して、向姓から旧姓小鷹狩に改姓しています。さらに、「古内藏人」は、文政十二年(一八二九)八月、大館から久保田城下に移っています。

手形堀端町南端の「山方太郎左衛門」は、天保元年(一八三〇)隠居し、内匠が家督を相続していますが、この絵図ではまだ「太郎左衛門」となっています。

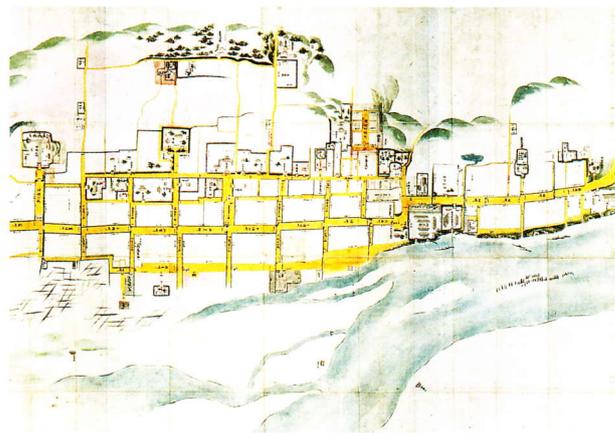
以上のことから、この絵図の原図は文政十二年(一八二九)頃に作成されたものと推測されます。

全体的にみると、城下町周辺地域の記載が詳細でかつ広域にわたっています。町名については、外町はもちろんのこと、侍町のほとんどにも記入されていることから、当時の侍町の町名を知ることができそうです。

「御兵具蔵」の堀を隔てて北側には、「御用御葉園畑」があり、北ノ丸の「大木屋」の東側は、「御花畑」になっています。また、鉄砲町西端には、「ロウ」(牢屋)や「芝居小屋」

## 「土崎湊町絵図」

(文化年間) 一四九×二六五



西方向の小路で区切られ、小路にはそれぞれ名前がつけられていましたが、海禅寺小路・加藤小路・清水下小路・善導寺小路・杉山小路・蒼竜寺小路・唐津小路・満船寺小路・根布屋小路・興安寺小路・青山小路・正善院小路・神明小路・稲荷小路・松前小路などを確認できます。

次に寺社や役所等の諸施設ですが、穀保町北部の街道西側に、佐竹分家の壱岐守家(鳥越様)の蔵屋敷である「壱岐守様御米蔵」と秋田藩の藩宮蔵屋敷である「御米蔵」、米穀等の流通の監視を行った「沖口御番処」が並んでいます。また、湊に出入りする荷物への課税を担当した「沖口出入役所」を、絵図中央部にみることができます。

満船寺小路を東へ進むと「藩主御休処」がり、寺院では、「虚空蔵社」「善導寺」「浄円寺」「正光寺」「蒼竜寺」「稲荷堂」「満船寺」「本住寺」「西船寺」「正善院」が並んでいます。

萱村町が肴町と改称したのは、文政五年(一八二二)のこととされており、作成年代は文化年間と考えられます。

この絵図には、穀保町から相染新田村までの直線的な町並みが描かれています。新城町から北に連なる羽州街道を本町通りといい、通りの両側に南から順に穀保町・新城町・上酒田町・下酒田町・永覚町・加賀町・小鴨町・萱村町・森町・新町とあり、この十か町で湊町の惣町を形成していました。また、町々では、南を上、北を下と呼んでいました。そして、各町は街道に直交する東

# 展示史料一覽

整理記号・番号	史料名	年号(西曆)
県C-178	御国替当座御城下絵図	慶長 9年(1604)
県C-166	秋田久保田城絵図	文政 4年(1821)
県C-169	御城内御座敷廻絵図	
県C-168	久保田城御城下絵図	寛文 初年(1661~)
県C-164	外町屋敷間敷絵図	寛文 3年(1663)
県C-165	御城下絵図	寛保 2年(1742)
A214.5-31	久保田御城下絵図	延享 2~3年(1745~46)
県C-599	御城下絵図	宝暦 9年(1759)
県C-600	城下御絵図	寛政 年間(1789~1800)
県C-179	御城下絵図	文政 4年(1821)
庵-184	羽州久保田大絵図	文政 12年(1829)
県C-182	土崎湊町絵図	文化 年間(1804~18)
AH312-272	土崎湊詰番所之略図	
A372-7	明德館図	
A291.5-36	久保田御城下外町絵図甲	
A291.5-36-1	久保田御城下外町絵図乙	
A291.5-39	秋田久保田外町道路絵図	
落1515	保戸野足軽組配置図	正徳 6年(1716)
	明德館平面図	
AS209-171-1	国典類抄 前編軍部1	慶長 9年(1604)
混辛-29-1	羽陰史略1	慶長 8年(1603)
A526-3	羽州秋田郡窪田城絵図帳	正保 4年(1647)
A280-69-22-3	秋田藩家蔵文書22 向文書	慶長 11年(1606)
A280-2-20-34	秋田藩家蔵文書20(樋口本)佐竹義宣文書	元和 3年(1617)
A312-130-7	梅津政景日記7	元和 4年(1618)
A312-130-8	梅津政景日記8	元和 5年(1619)
A312-130-9	梅津政景日記9	元和 6年(1620)
A312-130-19-1	梅津政景日記19	寛永 8年(1631)
AS209-174-16	国典類抄 後編賓部16	宝暦 9年(1759)
AS209-169-25	国典類抄 後編凶部25	安永 7年(1778)
AS289-18-1-12	御亀鑑 秋府12	寛政 7年(1795)
混18-215	当用式~屋敷割	寛政 3年(1791)
A289-319-27	洪江和光日記27	文政 3年(1820)
A672-1	羽州秋田郡久保田領土崎湊諸商人細見	
AS289-18-1-5	御亀鑑 秋府5	寛政 元年(1789)
AS289-18-1-7	御亀鑑 秋府7	寛政 2年(1790)
	東根小屋町遺跡・藩校明德館跡遺物	